

## 松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】金沢 文緒

【所属】（助成決定時）東京大学大学院人文社会系研究科

【研究題目】18世紀におけるイタリア人画家の雇用システムとヨーロッパ内移動についての研究

### 【研究の目的】

18世紀のイタリア人画家たちはヨーロッパ中にパトロンを有し、多くの場合、彼らの注文に応じてイタリア国内で制作に従事したが、中には新たなパトロンと仕事を求めてヨーロッパを遍歴する者もあった。彼らは、故郷を離れて異国にパトロンを見出し、これを失うと、次のパトロンを求めて新しい地へ出発するといった、いわば職探しの旅に生涯の大半を費やした。本研究では、その一人であるヴェネツィアの画家ベルナルド・ベロットの旅の事情を考察することで、当時ヨーロッパ内の移動が画家に対して持っていた意味を明らかにする。18世紀にはイタリアを中心としたヨーロッパの文化的中心地に向かうグランド・ツアーが広く浸透したが、その一方で、芸術家たちの間ではそのコースとは逆の、中心から辺境地域への移動も存在した。本研究は、こうした逆の、汎ヨーロッパ的移動に光を当てることによって、画家のヨーロッパ内移動の問題に双方向的なベクトルを準備することを目的とする。

### 【研究の内容・方法】

ベロットは1746年に故郷ヴェネツィアからドレスデンに向けて旅立つが、これはドレスデンのザクセン選帝候アウグスト3世の宮廷画家としての招聘を受けてのことであった。18世紀中庸、アウグスト3世の方針によりドレスデン絵画館のイタリア絵画部門の拡充が計画され、フランチェスコ・アルガロッチらイタリアの知識人がドレスデン宮廷の代理人としてイタリア国内で新たな作品の購入の交渉を行なった。本研究では、これら代理人たちの活動時期がベロットらイタリア人画家の旅行の時期と重なっている点に注目する。代理人たちの著作や書簡等の一次資料の分析を通して、購入が検討された作品の傾向や彼らと同時代画家の交流を調査することで、代理人たちのイタリアでの活動と画家の旅行の関係性を探り、画家がイタリアを出発するまでの経緯を考察する。

イタリアを離れた画家が辿り着いた先は、本来最終目的地となるはずであったドレスデンである。アウグスト3世の宮廷画家としての安定した雇用を受けていたベロットは、パトロンであるアウグスト3世の死を機に美術アカデミーの一教師に降格し、1767年に新たな雇用機会を求めてドレスデンを去る。サンクト・ペテルブルクを目指した旅は、途中地点のワルシャワにおいてポーランド国王スタニスワフ・アウグストの宮廷画家として雇用されたことで終わる。ここでは、ドレスデンからさらなる東へと旅を続けた点について考察するべく、ベロットが1765年のドレスデンの美術アカデミー展に出展した対作品に注目する。この2作品はその後、1767年に画家が東方への旅に出発する際に携行しており、旅行との関連性が深いと考えられる。先行研究ではこの対作品の制作背景についてはほとんど看過されてきており、新たに図像分析を行なうと共に、この時期に出版された雑誌、美術館カタログ等を丹念に精査し、さらに当時のドレスデンとワルシャワでの2作品の評価について比較検討する。

### 【結論・考察】

18世紀中庸に至るまで、ヨーロッパでは16世紀ヴェネツィア絵画の人气が根強く、ドレスデンにおいてもこれらの作品の購入が代理人を通して進められた。一方、18世紀のヴェネツィア人画家たちは16世紀ヴェネツィア派の後継者として理解される傾向にあり、この流れの中にベロットのドレスデン招聘を位置づけることができる。しかし1760年代になってドレスデンで新古典主義が台頭するとヴェネツィア絵画の影響力は薄れ、この時期にベロットが16世紀ヴェネツィア派の作風を模倣した作品はドレスデンでは評価されなかった。しかしベロットは、新たな旅行の目的地である以東の都市ワルシャワで、自己能力を宣伝する手段として敢えてこの作品を利用し、宮廷画家としての新たな雇用機会を得た。これは、周縁地域における芸術的動向の遅れ、すなわち依然として残るヴェネツィア絵画への愛好を示したものである。18世紀のイタリア人画家の東に向けた旅行は、こうした地域差を利用して宮廷画家としてのより安定した雇用を求めた画家の自発的行動であったと言える。